

# 人文科学とコンピュータ研究会の幹事・主査だった頃 —「じんもんこん」のことなど

山田奨治<sup>†1</sup>

筆者は、1995年4月から1997年3月まで研究会幹事を、1997年4月から1999年3月まで主査を務めた。その間に情報処理学会論文誌の特集号刊行や、人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん）の立ち上げに関わったことなどの記憶をここに記しておく。

## When I Was Engaged in SIG-CH: Memories of Jinmonkon et al.

SHOJI YAMADA<sup>†1</sup>

The author was appointed as a *kanji* of SIG-CH from April 1995 to March 1997, and as the *shusa* from April 1997 to March 1999. In this report, I write on my memories during the term: the publication of a special issue of the Journal of Information Processing; and the launch of the Symposium of Computer and the Humanities (Jinmonkon) et al.

### 1. はじめに

情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会（SIG-CH）が100回目の研究会を迎えたことは、筆者にとってもたいへん感慨深いことである。これを機に研究会のこれまでの歩みを記録し、現在と未来の世代に情報を遺しておくことは、意味のあることだろう。草創期のことは先達たちの文章に譲ることにして、ここでは筆者が研究会の幹事・主査を務めた1995年4月から1999年3月までのことを中心に、記憶を掘り起こして文章にしておきたい。

### 2. 幹事時代（1995.4-1997.3）

そもそも筆者がSIG-CHとかかわりを持ちはじめたのは、1992年3月の出雲市での第13回研究会からだった。その当時、わたしはコンピュータ会社の社員として国立民族学博物館との共同研究に従事していた。そのプロジェクトでの社内カウンター・パートで、SIG-CH設立の功労者でもある洪政国氏から、研究会での発表を依頼されたのが、参加のきっかけだった。したがって、設立や運営を軌道に乗せるときのご苦労を、筆者はみっていない。

1995年1月の大分大学での研究会の翌日のことだったと思う。折しも同年4月から及川昭文氏をリーダーとする科研費重点領域研究「人文科学とコンピュータ」がスタートするのを受けて、その準備会合が由布院温泉で開かれた。その帰途、湯布院か大分空港あたりの喫茶店か何かで当時の主査だった及川氏や洪氏らに取り囲まれ、次期の幹事を引き受けるよう迫られた。筆者はその日、不覚にも風邪を引いて高熱が出はじめていて、その場を早く逃れて横になりたい一心で幹事を引き受けたことを覚えている。そのとき筆者は、まだ31歳の短大助手だった。

そんなわけで、1995年4月から2年間、八村広三郎主査のもとで幹事を務めた。同僚幹事は齋藤雅氏と高橋晴子氏だった。研究会の幹事という、毎回の発表者集めに苦労するのが常なのだが、幸い及川科研が動いていたおかげで、発表数に困った記憶はあまりない。科研の会合で知り合った研究者に声をかけると、たいていどなたも喜んで引き受けてくださった。むしろ発表希望が集まり過ぎて、やむなくお断りしたことのほうをよく覚えている。また及川氏が科研の全体会議と研究会をリンクさせて設定してくださるなどしたため、研究会の参加者もよく集まった。

筆者が幹事時代にしたことのひとつに、研究会ホームページの作成がある。最初のサーバーは、筆者が努めていた短大の研究室に設置した。思いがけないことだが、そのときの基本デザインは現在のホームページにも引き継がれている。白状すれば、パソコンに向かう十二単衣の女性の画像も、墨書風の「人文科学とコンピュータ」の文字も、緑のバックグラウンドも、すべて及川科研の出版物をスキャンして加工した「パクリ」である。とはいっても、及川科研もSIG-CHも深い連携を持って動いていたので、誰も「パクリ」を糾弾したりしなかったし、いまでも関係者は笑って許してくれているだろうと思う。

### 3. 主査時代（1997.4-1999.3）

幹事団のなかで最年少だった筆者が、なぜ主査に指名されたのか、よく思い出せないのだが、無鉄砲にもそれを引き受けたのが、若気の至りだったことは確かだ。はからずも300名にも及ぶ研究者集団の行方を決める責任を背負うことになり、まさに身の引き締まる思いだった。

主査としての筆者が成すべきことは、はっきりとしていた。第1は、及川科研が1999年3月に終了することに備えて、その成果を査読付き学術論文として世に問える環境を

<sup>†1</sup> 国際日本文化研究センター  
International Research Center for Japanese Studies

整えること、第2は、及川科研が終わったあとに、そのコミュニティを発展させていく方法を考えることだった。

### (1) 論文誌の特集号

その当時、情報処理学会では個別の研究会が中心になって編集する査読付き論文誌がポツポツと出はじめていた。SIG-CHにはそのような媒体がなく、情報処理学会内で査読付き論文を出すには、学会全体の論文誌に投稿するよりほかになかった。ところが、筆者の実感では、その頃の学会論文誌では、SIG-CHのような「応用分野」に属する研究に対する評価は、あきらかに低かった。数式を駆使して理論を導き、非現実的なまでに限定されたデータに対して美しい結果を出した論文が評価されていた。SIG-CHでの研究によくあるような、非定型で例外だらけの実データと、数式も示さずに格闘した論文は、ほとんど相手にされていなかった。

そんななかで、及川科研の成果を査読付き論文として世に出していくためには、情報処理学の新たな可能性をインパクトのある形で示す必要があると考えた。そこで筆者が提案したのが、情報処理学会論文誌に人文科学とコンピュータの特集号を編むという企画だった。

この企画は、八村広三郎氏に特集エディターをお願いして、論文誌第40巻3号として1999年3月に実現した。この特集には、情報処理学会の論文誌としては異色な論文が並び、学会内には賛否両論の反応があったようだ。しかし、査読付き論文で勝負している研究者にとっては、そのような場が提供されるか否かは、当時もいまも変わらず大切なことだと考えている。

### (2) 人文科学とコンピュータシンポジウム

及川科研で出来た流れを引き継ぐ方法を考えることも、主査としての重要な任務だと筆者は思っていた。SIG-CH研究会はもちろん継続的に開催することにはなっていたが、それだけではメリハリのない会合が延々とつづき、やがて尻すばみになる危惧すら筆者は持っていた。そこで現実的な解として考えたのが、「人文科学とコンピュータシンポジウム」(じんもんこん)だった。

筆者の胸中にあった、じんもんこんの狙いはふたつあった。第1は、年1回のやや大規模なシンポル的なシンポジウムを開催し、及川科研で盛り上がったSIG-CHの勢いを保つこと、第2は、将来の論文誌発行に向けて研究者コミュニティとしての成熟を目指すことだった。第1の点はいわずもがなだろう。第2の点については、やや説明を要する。当時のSIG-CHの出版物は、研究会報告しかなかった。これは無査読であるため、学術的な評価には値しない媒体である。研究者にとって重要な査読付き論文を出すには、学会論文誌への掲載を目指すよりなかつた。しかし特集号の実績はあるものの、SIG-CHで行われている研究内容に照らすと、通常号への採録のハードルは、依然として高いものだった。

かといって査読付き論文誌を定期発行できるほどの実力は、SIG-CHにはなかった。そこで設定したのが、じんもんこんではアブストラクト・レベルでの査読を行うこと、査読を通して研究の評価基準を培い、SIG-CHにとつての「良い研究」とは何であるのかの共通認識を作っていくこと、少なくとも通常研究会の平均以上の研究を選択してシンポジウムの質を高めるという目標だった。重要なことは、将来、その気になれば論文誌を発行できるだけの実力を、SIG-CHのコミュニティが蓄えていくことだった。

第1回のじんもんこんは、1999年9月に国立民族学博物館で開催された。そのときには筆者はもう主査の任期を終えていたが、シンポジウムの運営・裏方などは、民博のスタッフの協力を得ながら、筆者の研究室にいたアルバイト・院生らで担った。

余談になるが、シンポジウムの略称に選んだ「じんもんこん」の語は、最初は及川科研の通称だったものだ。それがシンポジウムの略称に引き継がれ、さらに現在ではSIG-CH本体の愛称にもなっている。誠に語呂のよい造語で、これを最初に考えた及川氏の功は大きいと思う。また、第1回のポスター「喜怒哀楽」(図1)は(有)ティアンドティ・デザインラボの谷卓司氏の労作で、このときにデザインしていただいた「じんもんこん:-)」のロゴ文字は、現在でも使われている。

シンポジウムが継続するか否かは、第1回を行うかどうかよりも、第2回目が開催されるかどうかのほうが、はるかに重要である。確か「なくなるともつたいないから」という理由で、第2回目を引き継いでくださったのが、八村広三郎氏だった。それがなければ、じんもんこんは1回限りのお祭りで終わっていただろう。じんもんこんが現在まで毎年継続して開催されている最大の功労者は、八村氏だと筆者は思っている。

残念ながら、「通常研究会以上」の発表を選択するという、じんもんこんに対する当初の筆者の腹案は、コミュニティの支持を集めることはできなかったと判断している。発表をシビアに選別するよりも、研究会と同様に原則的に「来る者は拒まず」の、にぎやかな祭典にする道を、SIG-CHのコミュニティは選択したといえる。それはそれでひとつの見識であり、尊重されるべきものだと思筆者は考えている。じんもんこんが今年で14年もつづいていることが、コミュニティによる選択が完全なまちがいでなかったことを、何よりも証明している。

## 4. おわりに

自身の研究テーマが人文系寄りにシフトしたため、筆者はここ何年かの研究会に参加していない。したがって、筆者はSIG-CHの現状と将来について何かをいえる立場にはない。だが、日本と海外の学問状況をみていると、まず日本語での研究発信が国内でもほとんど評価されなくなつて

きていること、そして SIG-CH のカバーしてきた分野がデジタル・ヒューマニティーズの名称で広く認知されてきていて、国際的な学会やシンポジウムがいくつか誕生している。こうした状況変化に SIG-CH はどう対応していくのだろうか。

自身の幹事・主査時代のことを振り返ってみていえることもある。それは、幹事・主査時代に自分がまだとても若かったにもかかわらず、先達や同輩らの支援を得て自分なりのアイデアをいくつか実現できたことである。学会でも研究機関でも、それが命脈を保っていくためには、新しいアイデアを持った若手がつぎつぎと運営に参画し、周りが彼等を盛り立てていくことが必須だと筆者は考えている。逆に組織の活性を失わせるためには、先例や旧慣、「そもそも論」を古参が持ち出して、若手のアイデアを潰していけばよい。さて、SIG-CH の現在と将来は如何?



図 1 第1回じんもんこんのポスター

Figure 1 The poster of the 1st Jinmonkon.